

## 三カ国語の忘年会

### 1 ツムヴォール（乾杯）！

12月に入り、クライアントからクリスマス・パーティーや忘年会の誘いが多い。40代のころは体力があったから、3～4日続けての飲み会でも平気だったが、最近はずがにこたえる。飲む回数を減らさないと体がもたない。結局ドクター・コールの忘年会だけ出席することにし、他は全て丁重に断った。

この忘年会は楽しいメンバーなので、わたしは心待ちにしていた。場所は赤坂3丁目のしゃぶしゃぶ季節料理店。一つ木通りに交わる小路に入り、手狭な階段を上った3階にある。おせじにも綺麗とはいえないが、料理はうまい。

メンバーは、ドクター、顧問先の岩田法務部長、わたしの助手のロバート（カリフォルニア州弁護士）、それにわたしの4名。

6時半にわたしが真っ先に着き、ほどなくドクターがやってきた。合弁契約の交渉で春と一緒に仕事をして以来である。

こんばんわ、ドクター。今回の冬休みはどのくらい日本に滞在の予定ですか。

ミスター・ヤベ。半年ぶりですね。今回は1ヶ月ほど温泉に浸かるつもりですよ。

ドクターはわたしと同年代。ドイツ本社の社内弁護士で、首席法務部長の要職にある。目がやさしく、ショーン・コネリー（<sup>ゼロゼロセブン</sup>007 ジェームス・ボンドの初代男優）ばりの好男子。ふだんはミュンヘンで働き、週末は飛行機でハンブルグの自宅に帰る優雅な生活をしている。

アメリカの大学に学び、かつてはスイスの大学で国際取引法を教えた学究である。

ドイツ語、英語、日本語に堪能。長期休暇を取って日本の温泉めぐりをするのが趣味である。

続いて岩田法務部長が登場。部長はドクターと同じグループの日本の子会社に勤めている。ドイツ語と英語が堪能である。ドクターと部長は長年の友人である。

全員が揃ったところで、マスターが特大のまな板にオードブルを大盛りにもって来た。

鱈、鱸、ふぐ、あわび、きんき、鯖、ししゃも、毛蟹、うに、タコ、なまこ、鱈の白子、鴨などが並ぶ。この中から各人が好みで刺身、てんぷら、焼き物を注文する。

早速ビール、ふぐの鱈酒、おかんが並べられ、まずはドクターの来日を祝して Zum Wohl (カンパイ)。

お互い旧知の仲なので遠慮がない。助手が鴨のたたきを注文すると、皆が止めにかかる。鴨のたたきなんか聞いたことがない。止めた方がいい。

助手が反論する。

だけどメニューに載っているから大丈夫なんじゃないか……。

わたしが軽いジャブを送る。

ロバート、弁護士は何事も疑ってかからなきゃあならない。オレが日頃教えているだろう。

ドクターが、わたしの尻馬に乗ってジャブを送り続ける。

確かに「君子危うきに近寄らず」ということもある。鴨のたたきは危険だ。

皆も面白がって、「止めろ、止めろ」の大合唱。助手はやむなく鴨のたたきを止め、牛のたたきを頼むことする。

たいしてアルコールも入らないのに、皆はもう盛り上がっている。

## 2 談論風発、ジョーク連発

突き出しの菜の花のお浸しを食べながら、部長が口火を切る。

菜の花はピリッと苦いところがいいところで、苦味をちょっとだけきかせるのが日本料理の真髄だ。

(ドクター)

うーん、まあまあだね。それほどうまいとは思わないけど。

(わたし)

菜の花は、ドイツ語で何というのだろう。

ドイツ語に堪能な部長もドクターも、答えがない。2人の間でひとしきりドイツ語が飛び交ったが、誰も知らない。助手がしたり顔でいう。

日本にあるものがつねにドイツにあるとは限らない。菜の花のドイツ語はないんじゃないか。

眉唾もののロジックだが、早くも酔いがまわり始めて誰もおかしいとは思わない。

空のビールびんとおちょうしが、たちまち乱立する。酔うにつれ英語、日本語、ドイツ語の三カ国語が飛び交う。一人が話し終わるとすかさず誰かがジョークを放ち、笑いとお熱気でますます場は盛り上がる。

やがてオードブルが運ばれる。刺身が大皿に、海老のてんぷらが竹の籠に盛られ、なまこ酢やきんきの焼き物が各人にとり分けられる。酒の酔いと丁丁発止の会話が渾然として騒々しく楽しい。

話題は突然英語の訛りの話になる。

(わたし)

以前パナマの友人と話したとき、ヤング (young) をジョングというので聞き取るのにえらく苦労した。

(ドクター)

ニュージーランドやオーストラリアの英語も訛りが強いね。トゥデイ (today) をトゥダイ (to die) というんだからひどいもんだ。わたしも若いときは苦労したよ。

(助手)

ではクイズを出します。ネトディーとフアモスとは何のことですか？

(部長)

多分 study と famous のことでしょう。スペイン人の英語でしょう。

突然助手が口をはさんで、アメリカ英語の優越性を主張する。

勿論、アメリカのビジネス英語が、最も正統的な英語と言っていいんじゃないか。

(わたし)

そんなことはない。国際化の時代にどの国の英語が正しいなんていうことはありはしない。それぞれがそれぞれの英語でいいんじゃないか。イギリス人はクイーンズ・イングリッシュが最高だというぜ。もっともオレはロンドンで暮らしたけれど、(下町の) コックニーのアクセントは結局最後までわからなかった。

(ドクター)

コックニーの英語はわたしもわからない。しかし、日本人のカタカナ・イングリッシュもかなり訛りがある…。

(わたし)

確かに日本人の英語は訛っている。だけど、カタカナ・イングリッシュというのは始めて聞いた。ジャパニーズ・イングリッシュをジャパングリッシュというのは知っているが。

(助手)

確かに日本人の英語は奇妙だ。本当はムクドゥーノルズなのに日本人はマ・ク・ド・ナ・ル・ドと一語一語切って喋るんで、始めは何の事がわからなかった。ベンツ車だって、メッセーデス・ベンツなのに、日本人はメ・ル・セ・デ・ス・ベ・ン・ツと発音するから、外国人には通じないんだ。

前菜が終わり、しゃぶしゃぶ用のガスコンロが置かれると、すかさずドクターが大げさに驚いてみせる。

こんな事はドイツでは許されない！ガス管を食卓の上まで引っ張ってくるのは危険だから、ドイツでは禁止されている。ドイツの方が何事につけ安全なんだ。

せっかく話の種を提供したのに、この話は皆の注目をひかず、黙殺される。

薄くスライスした霜降りの肉が、大皿で運ばれてくる頃になると宴もたけなわ。

助手がしたり顔で叫ぶ。

この神戸肉の、どの部分がビールだ？

わたしが切り返えす。

そこの脂の白身から下の、2割がビールなんだ。

ドクターは「…？」。

部長が、「神戸牛は、ビールを飲ませて育てます。それを踏まえたジョークですよ」と説明して納得。

### 3 一刻千金<sup>いっごくせんきん</sup>の夕べ

ビールを注ぎながら、ドクターがわたしに絡んでくる。

グラスの目盛りはどこにあるんだ？

わたしがキョトンとしていると、部長が説明してくれる。

ドイツではビール・グラスに目盛りが入っていて、ビールを必ず目盛り以上注がなければならぬんです。泡ばかり多くなるのを防ぐためです。

(ドクター)

ドイツでは何事もきちんとしているんだ。

ドクターが自慢げにいうが、誰も感心はしない。

(わたし)

そういえば、シュトゥットガルトに出張した時、ホテルのサウナから裸の女性が出てきたのにはびっくりした。サウナも男女一緒なんだね。しかも水着も着ていない。日本ではきちんとしているから男女別だよ。

わたしは一本やり返したつもり。

(ドクター)

うん。だが、日本では江戸時代にも混浴だったじゃないか。

(わたし)

ま、そうだな。時代と場所が変われば、いろんな風習があるものさ。

飲み干したビールの瓶が、テーブルの上に1ダース近く林立している。

ドクターが、その中の一本を手にしてみんなに問いかける。

このビール瓶を何というのですか？

部長が真面目に答える。

それは大瓶といいます。ビール瓶には大瓶、中瓶、小瓶の3種があるんですよ。

ドクターが澄まして答える。

いいえ、これは「あき瓶」といいます。

皆の笑いがはじけた。

「年末年始の休みにケニアに行く」、と部長がドクターに話しかける。

(ドクター)

へー。ケニアにね。ケニアではスワヒリ語を話すんですけど。「こんにちわ」を何というんですか？

(部長)

えーと、「ジャンボ」っていうんです。

(ドクター)

冗談でしょう。

(部長)

いいや、本当ですよ。

すかさず、助手が茶々を入れる。

じゃあ、「こんばんは」は「エアバス」だ。

一瞬みんなはシンとしたが、助手が「飛行機の…」といいかけると一挙に爆笑。  
たしかに、ジャンボ飛行機の次世代がエアバス。「こんにちわ」がジャンボなら、「こんばんわ」はエアバスか。ひねったものだ。

各自、蟹ぞうすい、おむすび、稲庭うどんを食べた後、マスターがデザートのオーダーを取りに来る。

今日のデザートは、あんぼ柿の干したもので、シャーベット、いちご、それにパイアです。

ドクターが叫ぶ。

わたしは、ファーザー・ディスライク！

一瞬皆が静かになる。

ファーザー (father) はパパ、ディスライク (dislike) は日本語で嫌いやでしょう？  
だから、パイア！

ドクターの解説に爆笑がはじける。いやはやひどい駄洒落である。ふだん勤勉なドクターだけにメチャおかしい。

では、今日はこの駄洒落でお開きとしましょう。

あとは拍手また拍手。

外に出ると肌寒い風が吹いていたが、心は暖かった。ジョークは人の心をなごませ、精神を安定させ、そして人生に希望を持たせる。参加者の人選も良かったし、料理も美味しい、酒もよい。これ以上何も望むものはない。正に一刻千金の夕べ、至福の3時間だった。さてと…、今夜は熟睡が待っている。